

番は、古い建物の耐震・改修工事である。工事に併せて図書・雑誌の廃棄作業などをし、手を真っ黒にしなが、古い図書を数十年ぶりに眠りから覚ましては片っ端から捨てていくという作業に没頭した。また、自動貸出機が導入されたのも私が勤務し始めてからであった。効率的で便利になった反面、カウンターで学生と接する機会が極端に減り少し寂しい、という職員さんの意見もあった。

さて、最近では学生の図書館の利用者数が減っている、という話がちらほらと聞こえる。私がバイトしていた図

書館も、利用者を増やすために何かアイデアはないかと、職員さんが頭を捻っていた。学生の皆さん、暇を見つけて図書館に足を運んでみてはいかがでしょう。一回も入ったことがない人は、まずは一回目から。足を運ぶ回数が増えてくると、きっと高専時代の思い出の場所の一つに図書館が加わるはずですよ。

偉そうに語っている私ですが、こちらに着任してから、実はまだ館内を歩いて回ったことがありません…。まずは一回目から！

## 日本語力を鍛えよう！

電子システム工学科

岩本 直也



私がまだ大学生だった頃に出会った佐藤さん（仮名）という面白い人について紹介しようと思います。私は2005年3月に詫間電波高専を卒業したあと大学に編入しましたが、卒業研究を大学外のとある研究機関で行うことになり、そこで佐藤さんと出会いました。佐藤さんは、「実家から一番近い」という理由だけで京都大学に進学し、原子核工学の修士号を取得（数年後に博士号も取得）した秀才で、ちょうどその研究機関に研究者として採用されたばかりでした。学生時代は、陸上部で110mハードルに励み、本人曰く「関西の大学陸上界ではそこそこ有名だった」そうです。就職してからも、「自分の筋肉を最適の状態に保つためのコンディショニング（本人曰く筋トレとは異なるもの）」に余念がなく、己の肉体を日々鍛えていました。また、彼は深夜に放送されるTVアニメを「面白く無くても欠かさず見る」という、ちょっと変わったポリシーを持った人間でもありました。私が最初に出会ったときの佐藤さんは、「頭良いですオーラ」をガラガラと放っていて、近寄り難かったのですが、筋肉やアニメの話題を振ってみると満更でもない様子で、徐々に打ち解けることができました。

他に佐藤さんについて印象に残っていることのひとつに日本語力の高さがあります。彼の書いた文章や話し方、研究発表のプレゼンテーションは、とても分かりやすく、またユーモアに溢れていました。私は当初、関西人だからこんな風に面白いことを書いたり喋ったりできるんだろうと思っていました。しかし、後になって違う理由があることに気づきました。当時、私も佐藤さんもその研究機関の寮に住んでいたのですが、ある時、何かの用で佐藤さんの部屋を訪ねたことがありました。彼の部屋に入って最初に目に入ったのは、壁一面の本棚でした。寮の部屋は6畳程度だったので、それほど大きな壁ではないのは確かですが、それでも本棚にはぎっしりと本が詰まっていた。そこには、哲学書のような難しそうな

ものから、世間で話題の本やマンガまで様々なジャンルの本があったと思います。私はこれだと思いました。彼はこれだけたくさん本を読み、日々大量の日本語をインプットしているからこそ、いろんな日本語の引き出しを持っていて、場面場面に適した日本語をアウトプットできるのだと思います。

学生のみなさんは、工学系に進んだので、日本語力はそれほど必要無いと思うかもしれませんが、確かに、古文が読めたり、俳句が詠めたりする必要は無いかもしれませんが、おもしろい話ではできた方が良いでしょう、できなくても大丈夫です（私もできません）。しかし、分かりやすい文章が書け、話ができる能力は、工学系においても極めて重要です。もう気づいていると思いますが、実験をすればレポートを書く必要があり、卒研発表と卒業論文を仕上げなければ卒業できません。進学や就職してからも論文や報告書を書くことが多々あります。自分のした仕事を他の人に報告し認めてもらわない限り、仕事をしなかったのと同じと言われることもあります。みなさんの日本語力は果たして今のままで大丈夫でしょうか？

実は私も子供の頃、読書が大嫌いでした。読書するのは、夏休みの宿題の読書感想文を書くときだけで、課題図書という全く興味のない本を読まなければならないのは苦痛以外の何物でもありませんでした。でも、今は違います。自分の読みたい本だけを読めば良いのです。一旦読み始めた本でも、面白くなければ途中でやめれば良いのです。難しい本を読む必要もありません。何を読めば良いか分からなければ、世間で話題になっている本を読めば良いのです。ちなみに、私が今一番気に入っている作家は、「半沢直樹シリーズ」や「下町ロケット」を書いた池井戸潤さんです。香川高専、詫間キャンパスの図書館にも彼の作品がたくさんあるので、片っ端から借りて読んでいます。みなさんも面白い本を見つけたらぜひ教えてください。そして、一緒に日本語力を鍛えましょう。

# 卒業生・修了生から

## 卒業生

### 図書館利用のすすめ

機械電子工学科卒業生  
川口 大輝



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。昨年度図書委員長の川口です。この場を借りて皆さんに香川高専図書館の紹介をさせて頂こうと思います。

高専図書館は中学校の図書室に比べ、蔵書数・ジャンル共に豊富になっています。一般書籍は勿論、レポート作成等に使う専門書、TOEICや資格試験対策等に用いる学習教材等が多数あり、最新版もしっかりと配架されます。また、高専生の趣味に合った本も多数取り揃えています。中学図書室では恐らくなかったであろうCDの貸出しや、DVD視聴ルーム（貸出不可）もあり、授業の空きコマや放課後は多数の学生が利用しています。

さて、高専図書館の最大の特徴は年に2回行われるブッ

クハンティングにあると思います。ブックハンティングとは、各クラスの図書委員を中心に希望者が書店に赴き、各クラスに割り当てられた予算内で好きな本（漫画・写真集等を除く）を自由に購入できるシステムです。これにより、流行書籍や学生の趣味・ニーズにあった書籍を購入でき、図書館の利用率向上に繋がっています。ブックハンティングに参加しない学生も、カウンター横にあるリクエスト票がありますので、是非活用して下さい。

常日頃からの読書習慣は語学力・語彙力を鍛えるだけでなく、自分の会話や知識の引き出しを増やす事にも繋がります。高学年になると、インターンシップや就活等で文章を考えたり面接をする機会が増えてきます。その時に読書から得られた知識は必ず役に立つので、騙されたと思って読書する習慣を身に付けてください。

最後になりましたが、私は高専5年間、常に留年と闘い続けてきました。原因は低学年時の学習不足です。皆さんは私の過ちを繰り返さぬよう、常日頃から図書館の参考書や先生方を積極的に利用し、定量的な自学自習を行うように心がけて下さい。皆さんの5年間の高専生活が実りある物になる事を願っています。

### 私のおすすめの本

電子システム工学科卒業生  
水口 豪太



止まっているはずのイラストが動いて見える、同じ大きさのイラストが違って見える、平行な線が傾いて見える、などの現象が起こる原因を知り、実際に体験できる一冊、それが私のおすすめする本、『人はなぜ錯視にだまされるのか？』です。

カメラは受光素子が受けた光を電気信号に変換する装置で、入力された情報全てをできるだけ正確に出力しま

す。一方人間（生物）の目は進化の中で発生したものであって、カメラのように設計段階で仕様が決められているものではなく、長い年月を掛けて自然淘汰されて出来たものです。生きるのに必要な情報は強く、不必要な情報は弱くすることで消費する時間を最小限にするように進化し、コンピュータが発達した昨今気軽に錯視を楽しめるようになりました。

頭では分かっているのに、どうしても錯覚してしまうという感覚は日常ではなかなか味わえないと思うのでぜひ読んでみて下さい。この本は図鑑のようなデザインになっているので読みやすかったです。

『人はなぜ錯視にだまされるのか？』

北岡明佳著 カンゼン刊

## 修了生

### 自分に合う本

創造工学専攻修了生  
増尾 敬



私は、本科の五年間で図書委員を務めた後、専攻科の二年間は図書館でのアルバイトを行い、ずっと図書に関しての職務を行ってきました。ですが、決して多くの本を読んできたわけではありません。たぶん、本を読んだ量は普通の高専生に毛が生えた程度だと思います。しかし、多くの本には出会いました。

皆さん、本を読んだって面白くないし時間の浪費だと思いませんか？本なんて堅苦しそうなのが書いた内容だから自分には合わないって思いませんか？それはたぶん「自分に合う本」に出会ってないからだだと思います。

私はある時『バカの国』というある動画配信者が書いた本に出会いました。動画配信者が書いた本であるた

め書き方がネット風で読みやすい本でした。しかし内容は非常に堅苦しく読んだ当時は全く興味のないものでした。なのに、読むと面白いと思うようになったのです。それからは、日本の政治というものに非常に興味を持つようになり、政治に関する本を探して読むようになりました。これが「自分に合う本」です。

「自分に合う本」はどんなに分厚かろうが、文字が多かろうが、興味がなかろうが、無名の作者であろうが楽しく読めてしまうのです。なので、まず一度図書館を歩いてなんでもいいので適当に本を開いてください。三ページ読んで何も思わなければ閉じて戻してください。それを繰り返して何か思うものがあればそれを借りてください。借りても読んでいる途中でもしだめだと思ったら、返してかまいません。そのうち「自分に合う本」に出会え、本に興味を抱くと思います。

図書館は本を読む場所ですが、同時に本に出会う場所でもあります。だからまずは、本を読むために図書館に行くのではなく、「自分に合った本」に出会うために図書館に足を向けてみてはいかがでしょうか。